

失敗時に喚起されるネガティブ感情が後の学習行動に与える影響
—失敗観の個人差に着目して—

川 島 万由子

問題と目的

一般的に、失敗時に喚起されるネガティブ感情は否定的に捉えられがちである。先行研究では、失敗により落胆や無力感といったネガティブ感情が喚起されると、後の学習行動が抑制されるという因果関係が想定されていた (e.g., 速水, 2012; 奈須, 1990)。その一方で、ネガティブ感情の中でも特に後悔や悔しさといった感情は、後の学習行動を促進するということが明らかになってきている。しかし、従来の感情と学習動機づけ、学習行動の関連を検討した研究では、個人差がネガティブ感情に与える影響についての検討は皆無に等しい。そこで本研究では、失敗場面において喚起されるネガティブ感情と後の学習行動との関連について、個人が持つ失敗観という観点から検討する。失敗観とは、失敗に対する捉え方や価値観のことであり、2種類の失敗観が想定されている(西村ら, 2017)。1つは「失敗に対する活用可能性の認知」という、失敗経験後の学習につながり、かつ、教育上、子どもに身につけさせたい失敗観である。もう1つは、「失敗に対する脅威性の認知」という、失敗経験後の学習につながらず、かつ、教育学上、子どもに身につけさせたくない失敗観である。失敗時の対処行動との関連について着目すると、失敗に対する活用可能性の認知は、それが高い人ほど失敗時に、「間違えた問題に関する内容全体を復習する」といった適応的な対処方略を選択している。また、失敗に対する脅威性の認知は、それが

高い人ほど、「ふりかえりはせずに、やりっぱなしにする」といった不適応な行動を選択していた。このことについて、学習行動を直接規定するのは感情である(奈須, 1990)ということ を考慮すると、「失敗に対する活用可能性の認知」という失敗観をもった生徒が失敗経験をして、適応的な学習行動をとる過程には、失敗した時に生じる感情が学習行動を媒介していると考えられる。同様に、「失敗に対する脅威性の認知」という失敗観をもった生徒が失敗経験をすると、不適応的な学習行動をとる過程においても、失敗した時に生じる感情が学習行動を媒介していると考えられる。したがって、失敗場面において、失敗に対する活用可能性の認知といった失敗観を持つ人は、悔しさや後悔というネガティブ感情によって学習意欲や学習行動が促進されると推測することができる (figure 1)。また、失敗場面において、失敗に対する脅威性の認知といった失敗観を持つ人は、落胆や無力感のようなネガティブ感情によって学習意欲や学習行動が抑制されると推測することができる (Figure 2)。

方法

調査参加者 中学生 160 名を対象に質問紙実験を実施し、回答に不備のない 156 名を分析に使用した。

手続き 本研究では、質問紙調査を行った。まず、参加者に期末テストの英語の出来と学習時間を回答してもらった後、テスト結果から感じる感情得点を評定しても

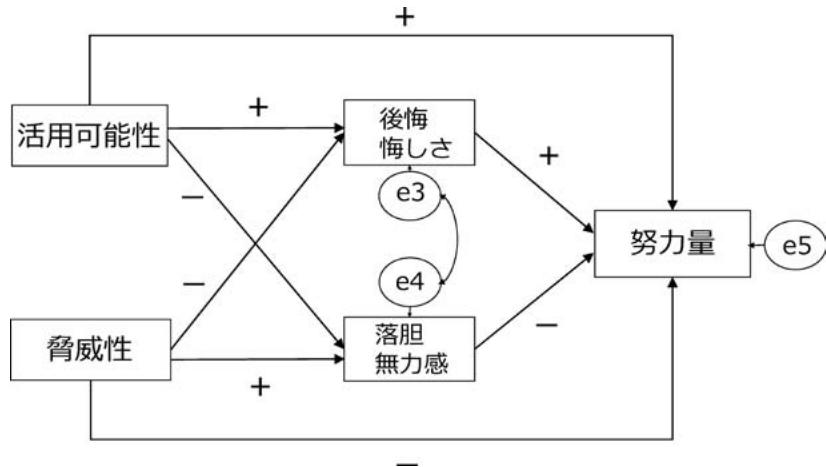


Figure 1. 失敗観→感情→努力量のパス図

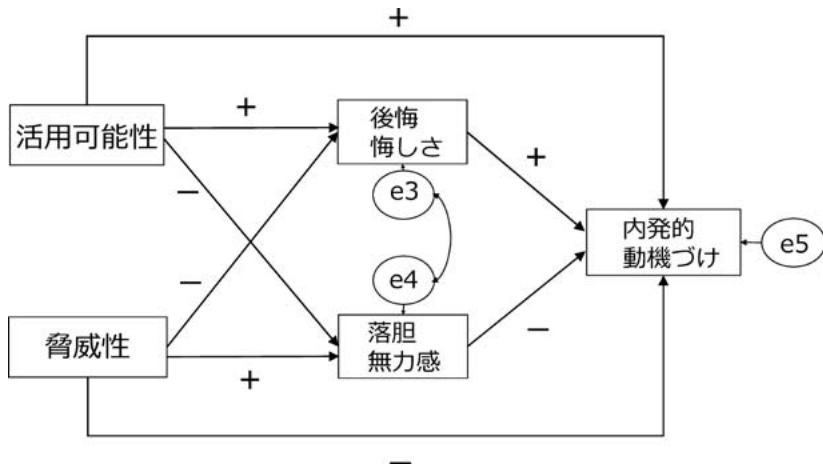


Figure 2. 失敗観→感情→内発的動機づけのパス図

らった。その後、内発的動機づけ尺度と次のテストでどれだけ頑張るかという努力量に回答してもらった。最後に、個人の持つ失敗観に回答してもらった。

結果と考察

失敗観（失敗に対する活用可能性の認知・失敗に対する脅威性の認知）から失敗場面の感情語（後悔・落胆）、学習行動（努力量・内発的動機づけ）という流れを想定してモデル図を作成した。モデル図の中の、後悔・悔しさ、落胆・無力感をそれぞれ入れ替え、計8種類のモデル図を採用し、パス解析を行った。分析の結果、失敗観に関わらず、努力量に対して、後悔からは有意な正のパスがみられたが、悔しさからは有意なパスがみられなかった。この結果から、失敗観の違いに関わらず、後悔は失敗後の学習行動を促進するということが示唆された。後悔と悔しさは、失敗後の学習行動を促進すると考えられていることから、同じような働きをもつ感情だと考えられていたが、後悔と悔しさは、相関が高い($r=.68$)ことから似たような概念ではあるものの、失敗後の努力量に与える影響は異なるということが示唆された。後悔は、「頑張ればもっとやれたのに」、「どうしてもっと頑張れなかったのか」といった質問項目からもわかるように、テスト結果を内省することで、自分の行動を見直すことができる感情であると考えられる。ここから、内省を伴う後悔は、自分の行いを振り返ることで、今回良い結果が得られなかった原因は何か、次成功するためには何が必要なのかについて考えることができる感情であると考えられるだろう。その一方で悔しさは、「くそ」と

いう気持ち」、「ひどいなあ」などの質問項目より、後悔と比べると一時的な感情である。このように、悔しさは一時的に生じる感情であるため、深く内省するまでには至らず、後悔に比べて、失敗後の学習行動を促進しないという結果が得られたと考えられる。これは、失敗後の学習行動を予測するうえで感情の機能に着目することの意義が示されたものといえる。また、失敗観に関わらず、落胆や無力感から努力量へのパスは有意ではなかった。ここから、落胆や無力感も、努力量にそこまで影響を与えないということがわかった。川島 (2017) では、大学生を対象に検討しているが、落胆や無力感も努力量を低めるとされている。しかし、今回、中学生を対象に調査を行った結果、落胆・無力感から努力量へのパスは有意ではなかった。この結果より、落胆や無力感といったネガティブ感情は、青年期の時期には、努力を低めないということが示唆された。ただ、失敗に対する脅威性の認知という失敗観から落胆・無力感へは正のパス（落胆： $\beta=.43$ 、無力感： $\beta=.30$ ）がみられ、その落胆や無力感から内発的動機づけへは弱い負のパスがみられた。つまり、失敗に対する脅威性の認知が、悔しさや落胆、無力感といったネガティブ感情に作用すると、落胆や無力感も内発的動機づけを低減させる効果があると示唆された。さらに、落胆や無力感といった感情は、のちの努力量には影響しないものの、内発的動機づけを低下させる恐れがあることが示唆された。内発的動機づけと努力量との間には正の関連があるため、内発的動機づけが低められると、努力量も下がってしまう恐れがあると考えられる。